
とある魔術と科学の交差

red star

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術と科学の交差

【NZコード】

N3958W

【作者名】

red star

【あらすじ】

人には過ぎた力を持つてしまった男。みつるかみこわや御剣神哉。

「人間には器というモノがあるんです。例えば、人間はおちょこサイズの力までしか行使できない。でも天使はどんぶりサイズの力を行使できる。

しかも神は給食の大鍋くらいの力を行使できる。全てに上限がある。体術はここまでが人間の限界。魔術も、頭脳も…。だけど僕にはその上限が無い。だから『死』も来ないんです」

この男はアレイスターの友であり師である男。

この男が、行動を開始するとき、魔術と科学は交差する

！

上条は補習から帰ってきて戸惑つた。

朝、ベランダに干されていた（本人いわく、追われていて飛び移ろうとしたら失敗した）

インデックスという不思議少女が空腹でぶつ倒れていた。

……と思ったら空腹なんて軽いもんじゃなかった。よく見てみるとそれは…

インデックスが血だまりの中に沈んでいる事に気づいた。

「……、あ……？」

最初に感じたのは、むしろ驚きよりも戸惑いだった。

たむろする清掃ロボットの陰になつていて見えなかつたのだ。うつ伏せに倒れたインデックスの背中 ほんと腰に近い辺りが、真横に一閃されていく。

まるで定規とカッターナイフを使って段ボールへ一直線に切り込みを入れたような刃物の傷。

腰まである長い銀髪の毛先は綺麗に切り揃えられ、

その銀髪も傷口から溢れ出す赤色に染め上げられていく。

上条は一瞬、それを『人間の血液』と認識する事ができなかつた。

「や、や……める。やめろっ！ くそ！ ……」

ようやく上条の目が現実にピントを合わせた。重傷のインデックスに群がる清掃ロボットに慌てて掴みかかる。盗難防止のため無駄に重たい清掃ロボットは馬力もあって、なかなか引き剥がす事ができない。

神様でも殺せる男のくせに。

こんなオモチャをどかす事さえ、できない。

インデックスは何も言わない。

血の氣を失つて紫色になつた唇は、呼吸しているかどうかさえ怪しいほどに動かなかつた。

「くそ、くそつ！！」混乱した上条は思わず叫んでいた。

「何だよ、一体何なんだよこれは！？　ふざけやがって、一体どこのどいつにやられたんだ、お前！！」

「うん？　僕達『魔術師』だけど？」

だから　　だからこそ、背後からかかつた声は、インテックスのものではない。

殴りかかるように上条は体ごと振り返る。エレベーター……ではない。

その横にある非常階段から、男はやってきたようだつた。白人の男は一メートル近い長身だつた。

神父と呼ぶにも、不良と呼ぶにも奇妙な男。

上条が最初に感じたのは、『恐怖』でもなければ『怒り』でもない。

『戸惑い』と『不安』。まるで言葉も分からぬ異国でサイフを盗まれたような、絶望的な孤独感。じりじりと、体の中へ広がる氷の触手のような感覚に心臓は凍り、上条は思い至る。

これが、魔術師。

ここは、魔術師という違うモノが存在してしまつ、一つの『異世界』と化していた。

「安心してください」

そう聞こえる。上条の相当後ろから声がかかる。

「まるで虚空から現れるように来たね。空間移動能力者かい？」

「いえ、違いますよ。そんなことより早くけが人を治療しないと

テレポータ

と言つて声は上条の方に近づいてくる。

「あんたは誰だ？」

思わず聞いてしまう。

「16歳の健全なオトコノコです」

なんか馬鹿にされた気分。そんなことより何をしに来たのだろ？
そうと思つた矢先に男はインデックスの傷口に触れていた。そして
男は言葉を紡ぐ。

「私は紡ぐ、癒しの言霊を。傷つき倒れた兵へ、病に伏した才女へ
と。『快復』」

すると、みるみる傷は癒えていった。まるで何事も無かつたように
戻つた。

「何者だい？君は。見たところ今のは魔術だつたけど」

「さあ？何者でしょう？」

なんて会話をしている。

「氣を付けてください。彼が狙つているのは10万3000冊の魔
導書ですからね」

そんな事を言つたつて、インデックスは一冊の本も持つていない。
あんな体のラインがはつきり見える修道服なら服の下に隠したつて
分かるはずだ。

大体、一〇万冊もの本を抱えて人が歩けるはずがない。
一〇万冊つて……それは図書館一つ分もあるんだから。

「ちょっと待つてくれ！そんなもん、一体どこにあるって言つんだ
！？」

「あるわ。ソレの記憶の中に」
あたま

サラリと。魔術師は当然のように答えた。

「完全記憶能力、つて言葉は知ってるかな？ 何でも、『一度見た
ものを一瞬で覚えて、一字一句を永遠に記憶し続ける能力』だそ
うだよ。簡単に言えば人間スキヤナだね」

魔術師はつまらなそうに笑い、

「これは僕達みたいな魔術オカルトでも君達みたいな超能力S.Fでもなく、單な

る体质らしいけど。彼女の頭はね、これら世界各地に封印され持ち出す事のできない『魔導書』を、その田で盗み出し保管している『

魔道図書館』って訳なのさ」

「ま、彼女自身は魔力を練る力がないから無害なんだけど」

魔術師は愉快げに口の端の煙草を揺らし、

「そんな安全装置^{スッパー}を用意する辺り、『教会』にもいろいろ考えがあるんだろうね。まあ魔術師の僕には関係ないけど。とにかくその一〇万三千〇〇〇冊は少々危険な代物なんだ。だから、使える連中に連れ去られる前にこうして僕達が保護しにやつてきた、って訳さ」

けど、と魔術師は言葉を切つて

「魔術師がいるみたいだから先にそつちをやることにするよ。そつちの方が厄介だしね。それに魔術師が相手なら遠慮なく本気を出せる」

そして言つ。

「スタイル＝マグヌスと名乗りたい所だけど、『Jijis Fortis 931』と言つておこうかな」

「それじゃあ僕も、felicitas001と言つておきます」
詠唱を始める。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ^{イノケンティウス}『魔女狩りの王ですか。確かに強い、でも詠唱が遅いのがネックですね』

そう言つて指を鳴らすと男の眼の前に炎が噴き出る。
そして彼は凛とした、響かせるような聲音で言靈を紡ぐ。

「我が喚びかけに応えよ！－魔女狩りの王ッ－！」

噴き出た炎が炎の塊になつてゐる。それはただの炎の塊ではなかつた。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のような黒くドロドロしたモノが『芯』になつてゐる。

それは人間のカタチをしていた。
（アーティクス）

その名は『魔女狩りの王』。その意味は『必ず殺す』。

「なつ！？魔女狩りの王が一声で！？」

「魔力の差ですね。どうします？僕くらいの魔力があればあと6体くらい出せますが……」

ステイルは焦つていた。なぜルーンも詠唱もなしに法王級の魔術を行使できるのか。

あと6体は出せる、もしその言葉が本物なら…。

敵は大魔術師『アレイスター・クロウリ』に勝るとも劣らぬ大魔術師だ。

「10秒以内に立ち去れば、見逃しますが」

スタイルは恨みを体現したような顔で去つて行つた。

隣の部屋から目覚め、いかにも思われる「うんうん」が聞こえて、起き上がる。

「大丈夫か？インデックス。どこか痛むところとか無いか？」

「大丈夫だよ。ありがとうね」

微笑みから一転してすぐ真面目な顔になり、男に向かって語り、

「あなたは何者?」

聖人・神裂火織と嘘

「あなたは何者？」

インデックスはそう聞いた。

しかし、帰ってきた答えは。

「何者でしよう？じゃあそれでは」

そう言つて消えた。だがインデックスによると魔術は使っていなかつたらしい

六〇〇メートルほど離れた、雑居ビルの屋上で、ステイルは双眼鏡から田を離した。

「禁書目録に同伴していた少年の身元を探りました。……禁書目録は？」

ステイルはすぐ後ろまで歩いてきた女の方も振り返らずに答える。「生きてるよ。……だが、敵側の魔術師が強すぎる。僕じや相手にならないよ」

女は無言だつたが、新たな敵よりむしろ誰も死ななかつた事に安堵しているように見える。

女の歳は十八だつたが、十四のステイルより頭一つ分も身長が低かつた。

もつとも、ステイルは一メートルを超す長身だ。女の身長も日本人の平均からすればやはり高い。

腰まで届く長い黒髪をポニー・テールにまとめ、腰には『令刀』と呼ばれる日本神道の雨乞いの儀式などで使われる、長さ一メートル以上もある日本刀が鞘に収まっている。

ただし、彼女を『日本美人』と呼ぶのは少し抵抗があるだろう。格好は着古したジーンズに白い半袖のTシャツ。

ジーンズは左脚の方だけなぜか太股の根元からばつさり斬られ、Tシャツは脇腹の方で余分な布を縛つてヘソが見えるようにしてあり、脚にはヒザまであるブーツ、日本刀も拳銃みたいなホルスターに挟むようにぶら下げる。

こうして見ると西部劇の保安官が拳銃の代わりに日本刀を下げているように見える。

香水臭い神父姿のスタイルと同様、まともな格好とは思えなかつた。

「それで、神裂。アレは一体何なんだ？」

「それですが、男の情報は特に集まつていません。少なくとも魔術師や異能者といった類ではない、という事になるのでしょうか？」

「何だ、もしかしてアレがただの高校生とでも言うつもりかい？」

スタイルは口に咥えて引き抜いた煙草の先を睨んだだけで火をつけ

る。

「……やめてくれよ。僕はこれでも現存するルーン＝四字を完全に解析し、新たに力ある六文字を開発した魔術師だ。そこらの魔術師が、裁きの炎イノケンティウスを退けられるほど世界は優しく作られちゃいない」

「そうですね」神裂火織は目を細め、

「……むしろ問題なのは、アレだけの戦闘能力が『正体不明』となつていてる事です」

この学園都市は超能力者量産機関という裏の顔を持つ。

五行機関と呼ばれる『組織』に、スタイルや神裂 その上の『組織』は禁書目録の事を伏せるとはいえ、事前に連絡を入れて許可を取つていた。

名実ともに世界最高峰の魔術グループでさえ、敵の領域フィールドでは正体を隠し続ける事は不可能と踏んだからだ。

「情報の……意図的な封鎖、かな。しかも禁書目録の傷は魔術で癒したときだ。神裂、この極東には他に魔術組織が実在するのかい？」

ここで彼らは『あの少年は五行機関とは別の組織を味方につけている』と踏んだ。

「……この街で動くとなれば、何人も五行機関のアンテナにかかる
はずですが」

神裂は目を閉じて、

「敵戦力は未知数、対してこちらの増援はナシ。難しい展開ですね」
たしかにそうだ。少なくともステイルより強い魔術師であることは確定しているのだから。

「最悪、組織的な魔術戦に発展すると仮定しましょ。」
「ルンゼウフミーノーロー！」。

まるでトレーディングカードのような刻印を手品師のように取り出
し、

「今度は建物のみならず、周囲一キロに渡つて結界を刻む…… 使用枚数は十六万四〇〇〇枚、時間にして六〇時間ほどで準備を終えるよ」

現実の魔術はゲームのように呪文を唱えてハイおしまい、という訳にはいかない。

一見そう見えるだけで、裏では相当な準備が必要となる。
スタイルの炎は本来『一〇年間月明かりを溜めた銀狼の牙で……』たまごのうち きば

詰まる所、魔術戦とは先の読み合いだ。

戦闘が始まつた時点ですでに敵の結界にはまつてゐると考え、受け手は相手の術式を読み、逆手に取り、さらに攻め手は反撃を予測して術式を組み直す。

単純な格闘技と違い、常に変動する戦況を一〇〇手一〇〇手先まで読む所を考えると、それは『戦闘』という野蛮な言葉とは裏腹な、とてもない頭脳戦と呼べる。

そういう意味でも、『敵の戦力は未知数』というのは魔術師にとって

「 うが 狂三 か が ね

と、不意にルーンの魔術師は双眼鏡も使わず、六〇〇メートル先を見て呴いた。

「楽しそう、本当に本当に楽しそうだ。あの子はいつでも楽しそうに生きている」

何か、重たい液体でも吐き出すよつこ、
「……」

「……僕達は、一体いつまでアレを引き裂き続ければ良いのかな
神裂はスタイルの後ろから、六〇〇メートル先を眺める。
双眼鏡や魔術を使わなくても、視力ハ・〇の彼女には鮮明に見える。

何か激怒しながら少年の頭にかじりついている少女と、両手を振り回して暴れている少年の姿が窓に映っている。

「複雑な気持ちですか？」神裂は機械のようこ、「かつて、あの場所にいたあなたとしては」

「……、いつもの事だよ」

炎の魔術師は答える。まさしく、いつもの通りに。

おつふろ　　おつふろ　　と上条の隣で、両手に洗面器を抱えたインテックスは歌っていた

何だよそんなに気にしてたのか？正直、匂いなんてそんな気になんねーぞ？」「

「汗かいてるのが好きな人？」

「そういう意味じゃねえッ！！」

あちこち出歩けるようになった彼女の願いが風呂だった。
それ

そんなこんなで、洗面器を抱えて夜の道を歩く若い男女が一組。

「とうま、とうま」

人のシャツの一腕を甘く噛みつづインテックスはややくべもつ

た声で言つ。

「……何だよ？」

上条は呆れたように答えた。

『そり言えば名前しらない』とインデックスに今朝自己紹介してから、かれこれ六万回ぐらい名前を呼ばれまくつたからだ。

「何でもない。用がないのに名前が呼べるって、なんかおもしろいかも」

たつたそれだけで、インデックスはまるで初めて遊園地にきた子供みたいな顔をする。

インデックスの懐き方が尋常ではない。

まあ、原因は三日前のアレだろうが……上条は嬉^{うれ}しいと思つより、今まであんな当たり前の言葉すらかけてもらえなかつたインデックスの方に複雑な気持ちを抱いてしまう。

「お前にや『デカイ風呂は衝撃的かもな。お前んトコつてホテルにあらみたいな狭つ苦しいユニットバスがメジャーなんだろ?』

「んー? ……その辺は良く分かんないかも」

インデックスは本当に良く分からぬといつ感じで小さく首を傾^{かし}げた。

「私、気がついたら一日本にいたからね。向こうの事ははちよつと分からぬんだよ」

それだと、『イギリス教会まで逃げ込めば安全』とこいつ言葉の方が微妙になつてくる。

てつくり地元に帰るのかと思つたら、実はまだ見た事もない異国に出かける訳だ。

「あ、うつと。そういう意味じゃないんだよ」

と、インデックスは長い銀髪を左右に流すよつに首を振つて否定した。

「私、生まれはロンドンで聖ジヨージ大聖堂の中で育つてきました。いんだよ。どつも、じつにきたのは一年ぐらい前から、らしいんだね」

「うしー？」

上条が曖昧な言葉に思わず眉をひそめた所で、

「うん。一年ぐらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスは、笑っていた。

本当に、生まれて初めて遊園地にやつってきた子供のよつ。元気のよい、
その笑顔が完璧だからこそ、上条には、その裏にある焦りや辛さ
が見て取れた。

「最初に路地裏で目を覚ました時は、自分の事も分からなかつた。
だけど、とにかく逃げなきやつて思つた。昨日の晩ご飯も思い出せ
ないのに、魔術師とか禁書目録とか必要悪の教会とか、そんな知識
ばっかりぐるぐる回つてて、本当に怖かつた……」

「……じゃあ、どうして記憶をなくしちまつたかも分かんねーって
訳か」

うん、といつ答え。上条だつて心理学はサッパリ分からぬが、
ゲームやドラマじや記憶喪失の原因なんて大体二つに限られてくる。
記憶を失うほど頭にダメージを受けたか、心の方が耐えられない
記憶を封印しているか。

「くそつたれが……」

上条は夜空を見上げて思わず呟いた。こんな女の子にそこまです
る魔術師達に対する怒りもあるが、詫のない事とはいえ自分に対す
る無力感が襲つてくる。

インデックスが異常に上条を庇つたり懐いたりする理由も分かつ
てきた。

何も分からず世間に放り出されて一年、ようやく会えた最初の『
知り合い』がたまたま、上条だつただけだ。

上条は、それを嬉しく思えなかつた。

なぜだか知らないが、そんな『答え』は上条をひどくイライラさせ
る。

「むむ？ とつま、なんか怒つてる？」

「怒つてねーよ」ギクリとしたが、上条はシラを切った。

「なんか気に障つたなら謝るかも。とつま、なにキレてるの？ 思

春期ちゃん？」

「……その幼児体型にだきや思春期とか聞かれたくなーよな、ホン

ト」

「む。何のかなそれ。やっぱ怒つてるよつに見えるけど。それともあれなの、とうまは怒つてるふりして私を困らせてる？ とつまのそういう所は嫌いかも」

「あんな、元から好きでもねーくせにそんな台詞吐くなよな。いくら何でもお前にそこまでラガーメいた素敵イベントなんぞ期待しちゃいねーからひ」

「……、」

「て、アレ？ ……何で上田遣いで黙つてしまわれるのですか、姫

？」

「……、」

超強引にギャグに持つていりうとしてもインテックスはあるで反応してくれない。

おかしい、なんか変だ。何でインテックスは胸の前で両手を組んで、上田遣いの目尻に涙が浮かびそうな傷ついたっぽい顔をして、あまつさえちよつと甘く下唇を噛んでいるんだろう？

「どうせ」

はー、と上条は名前を呼ばれたのでとりあえず返事を返してみると、とてもなく不幸な予感がした。

「だいっさらい」

瞬間、上条は女の子に頭のてっぺんを丸かじりされるとつレアな経験値を手に入れた。

インテックスは一人でさっさと銭湯へ向かつてしまつた。

一方、上条は一人でトボトボ銭湯を目指していた。

「あれ？」

何かが、おかしい。はデパートの電光掲示板の時計を見る。午後八時ジャスト。

まだまだ人が眠る時間でもないはずなのに、何だか辺りが夜の森みたいにひどく静まり返つている。

妙な、違和感。

そう言えばインテックスと一緒に歩いていた時から、誰ともすれ違つていながら……。

上条は首をひねりつつも、そのまま歩き続ける。

そして、大通りに出た時、かすかな違和感は明確な『異常』に進化した。誰もいない。

コンビニの棚に並ぶジュースみたいにずらりと並ぶ大手デパートには誰も出入りしていない。

いつも狭いと感じる歩道はやけにだだつ広く感じられ、まるで滑走路みたいな車道には車の一台も走っていない。路上駐車してある車はそのまま乗り捨てられたように無人。まるでひどい田舎の農道でも見ているようだつた。

「スタイルが人払いの刻印を刻んでいるだけですよ」

ゾン、と。いきなり顔の真ん中に日本刀でも突き刺されたような、女の声。

気づけなかつた。

その女は物陰ものかげに隠れていた訳でも背後から忍び寄つてきた訳でもない。

上条の行く手を遮るように、滑走路のように広い車道の真ん中に立つていた。

暗がりで見えなかつたとか気がつかなかつたとか、そんな次元ではない。

確かに一瞬前まで誰もいなかつた。

だが、たつた一度瞬きした瞬間、そこに女は立つていたのだ。

「この一帯にいる人に『何故かここには近づこうと思わない』ように集中を逸らしているだけです。多くの人は建物の中でしょう。ご心配はなさらず」

理屈よりも体が　無意識に右手に全身の血が集まつていく。ギリギリと手首をロープで縛られるような痛みに、上条は直感的にコイツはヤバイと感じ取つた。

女はTシャツに片脚だけ大胆に切つたジーンズといつ、まあ普通の範囲の服装ではあつた。

ただし、腰から拳銃のようにぶら下げた長さ一メートル以上もの日本刀が凍える殺意を振りまいていた。刀身は鞘に収まつて見えないが、すでに『本物』を裏付けていた。

「神淨の討魔、ですか　良い真名です」

そのくせ本人は緊張した様子を見せない。まるで世間話のような気楽さが、かえつて怖い。

「……、テメエは」

「神裂火織と申します。……できれば、もう一つの名は語りたくないのですが」

「もう一つ?」

「魔法名、ですよ」

ある程度予想していたとはいえ、上条は思わず一歩後ろへ下がつた。

魔法名　ステイルが魔術を使って男を襲つた時に名乗つた『殺し名』だ。

「　て事は何か。テメエもステイルと同じ、魔術結社とかいう連中なんだな」

「……？」神裂は一瞬だけ不審そうに眉をひそめ、「ああ、禁書目録に聞いたのですね？」

上条は答えない。

魔術結社。一〇万二〇〇〇冊の魔道書を欲して、インテックスを追い回す『組織』。

魔術を極め、世界の全てをねじ曲げると言われる、『魔神』と呼ばれる人間に辿り着く事を望む『集団』。

「率直に言って」神裂は戸田を開じて、「魔法召を召乗る前に、彼女を保護したいのですが」

ゾッとした。

上条は右手という切り札を持つていながら、それでも田の前の敵に悪寒を覚えた。

「……嫌だ、と言つたら？」

それでも、上条は言った。退く理由など、どこにもなかつたから。

「仕方ありません」神裂はもう片方の田も閉じて、「名乗つてから、彼女を保護するまで」

「ドン！」とこう衝撃が地震のように足元を震わせた。

まるで爆弾でも爆発したようだつた。

視界の隅で、蒼い闇に覆われたはずの夜空の向こうが夕焼けのよくなオレンジ色に焼けている。どこか遠く　何百メートルも先で、巨大な炎が燃え広がっているのだ。

「イン、デックス……ツ！」

敵は『組織』だ。そして上条は炎の魔術師の名前を知つてゐる。

上条はほとんど反射的に炎の塊が爆発した方角へ田を向けようと見て、

瞬間、神裂の斬撃が襲いかかってきた。

上条と神裂の間には一〇メートルもの距離があつた。
加えて、神裂の持つ刀は二メートル以上の長さがあり、

女の細腕では振り回す事はおろか鞘から引き抜く事さえ不可能に見えた。

「はずだつた。

なのに、次の瞬間。巨大なレーザーでも振り回したように上条の頭上スレスレの空気が引き裂かれた。驚愕に凍る上条のすぐ後ろ一斜め右後ろにある風力発電のプロペラが、まるでバターでも切り裂くように音もなく斜めに切断されていく。

「やめてください」一〇メートル先で、声。

「私から注意を逸らせば、辿る道は絶命のみです」

すでに神裂は二メートル以上ある刀を鞘に収めている。あまりに速すぎて上条には刀身が空気に触れた所さえ見る事ができなかつた。

「はあ、ワイヤーですか」

「なつ！？」

神裂にすら見えない速度で上条の後ろに現れる。「あんたは……」

「はい。正義の味方の登場で～す」

やつぱりうぜえ。待て、今何て言った？ワイヤー？じゃああれはワイヤーでの攻撃か！

「じゃあ、神裂さんでしたつけ？あなたはこれをかわせるかなあ？」

男の手の中に今まで無かつた日本刀が現れる。無駄な装飾が一切ない1・2メートル程の長刀である。

「よいしょっと」

姿がブレる。神裂の後ろの信号機が斬れた。

「まあ、無理でもいいんですけどね」

神裂が漸く口を開く。

「聖人のわたしを超える身体能力。何者ですか！？」

「やつぱり聖人だったんですね。僕はそこいらへんの魔術師ですよ」

へらへらと笑いながら言つ。

「それと、あらかじめいつときますが、インテックスさんが15%しか脳が使えないというのは…」

男は大きく息を吸つて、努めて明るく見えるよひに言へ。

「嘘で～す」

神裂は目を見開いた。

アドバイスお願いします。

聖人の涙と死闘

「う……そ？」

神裂は愕然としていた。ただ、外見に出してはいけない。表情に表わしてはいけない。

出来るだけ無表情で感情を出さずに矛盾点と不確定要素を出来うる限り見つけるんだ。

それで、私たちのやつてきたことが、あの子の記憶を殺し尽くす事が正しいという事を証明するんだ。

「見ず知らずの魔術師に言われたことをどう信用しようと？」

「うまくできたはずだ。」

「あらあら、これでも僕は勉強できる方なんですよ。それに、僕はどちらかといふと科学寄りですし」

そう言うと話し始めた。

「確かに完全記憶能力はどんなゴミ記憶インテックス去年のスーパーの特売チラシとかも忘れる事はできませんけど、別にそれで脳がパンクする事は絶対にありません。彼らは一〇〇年の記憶を墓まで抱えて持つてください、人間の脳は元々一四〇年分の記憶が可能ですからね」

神裂はその男の言葉をなぜか信用しようと思つてしまつた。だが、不確定要素はまだある。

追求できる所はある。確実に潰していく、自分たちのやつてる事は正しいんだ。

「ですが。10万3000冊の魔道書を覚えていたら？魔道書はそこの文庫本じゃ無いんです。田を通すだけで魂が穢けがれてしまう本。それに、1ページ1ページに、びっしり文字が書かれているようなページが、どんなに少なくとも1000ページはあります。そんな

ものを10万3000冊も記憶していたり、脳の85%くらい、簡単に費やせると思いますが」

論破できたか？

「神裂さん、そもそも人の「記憶」とは一つだけではありません。言葉や知識を司る「意味記憶」、運動の慣れなんかを司る「手続記憶」、そして思い出を司る「Hピソード記憶」とか、色々あります」

「どういう事ですか？私には理解しかねますが」

「つまり、それぞれの記憶は容れ物が違うんです。燃えるゴミと燃えないゴミのようなもので。例えば頭を思いつきり打つて記憶喪失になつたって、ばぶばぶ言つてそこら辺をハイハイする訳ないですよね？ってことは、まさか、本当に…。」

「10万3000冊の魔道書を覚えて「意味記憶」を増やした所で、思い出を司る「Hピソード記憶」が圧迫されるなんて事は、脳医学上絶対にありえません。」

「解呪は大変だと思いますが

「それについては問題ねえよ

「どうこうことですか？」

魔術師が眉をひそめる。

「俺の右手は『幻想殺し』^{イマジンブレイカー} つつう能力を持つててな。それが『異能の力』であるなら、神様の奇跡も問答無用で無力化させる。ついう能力の右手だ」

「なるほど、それが本当なら解呪なんてしなくても大丈夫ですね」

「それじゃあ、もしかして、インデックスを救えるって事か？」

「はい」

その言葉に神裂は泣いた。両手で顔を隠し、声をひそめて。全く人

のいなくなつた大通りで…。

その涙は歡喜で、自らの無力感の結晶で、感謝で、色々な感情がごちゃ混ぜになつて涙線をどんどん刺激していく。神裂は止まらない涙を止めようとはしなかつた。

むしろ、もう少しこの今までいたいくらいだ。

でもそんな感情が不安定な状態で、最後に神裂の心を支配し、それでいっぱいになつた感情は……。

何よりも『歡喜』だつた。

神裂はそれをいち早くスタイルに伝える。そうするとスタイルは神裂が思つた通りの反応をした。

「は、ははは、あはははははは… そつか、彼女は、インデックスは助かるんだね」

「そうです。彼女の記憶をもう、消さなくていいんです」「そつ言うとスタイルはこう言つ。

「そつと決まれば話は早い。今夜にでも彼女を救おう」

「そうですね。スタイル」

決意した顔をして、夜12時10分に上条家に一人は降り立つた。そこには……。

- - - - - 同時刻 - - - - -

上条はインデックスにスタイルと神裂の素性の事、インデックスにかけられている魔術の事、全てを包み隠さず話した。（情報元は神裂を圧倒した、あの魔術師。

名前は知らない）

「どうやら、シヨックも受けたようだが聞いてくれた。
しばらくして家で「ロロロ」ときに、ふと思ひ出したよう
に上条が言つた。

「インテックス、ちょっとといいか？」

「なに？ どうま？」

上条はいきなりインテックスの体をペタペタと触つてゐる。
インテックスは顔を真つ赤にしながら言つた。

「なつ… どうま！？ そういう事はダメなんだよ！」

上条は聞こえていたからしく、「……でもないか… ジャあここか？
違うか…」などと言つてゐる。

「~~~~~つー！」

ガブリ… という快活な… いや、殺人的な音がしたと思えば、上条は
頭を丸かじりされていた。

- - - - 1分後 - - - -

傷だらけの上条はインテックスの前に正座させられていた。

「どうま、今なら許してあげるかもだよ」

聖母のような微笑みで言つてくる。

「いや、違うんです。別に他意は無かつたんです。神に誓つて」
そんな会話を繰り広げているとき、玄関が不意に開いた。

「邪魔するよ…… と、何やつてるんだい君たちは？」

「お邪魔しま…… 「ホンッ、どうやら見間違いだつたようですね」

- - - - 状況説明中 - - - -

「とりあえず、分かつていただけましたでせつか

スタイルはため息をついて言つた。

「とりあえずこんなラヴコメは終わりにして早く呪いを解くよ

「ラヴコメでは無いけど…わかつた。やろう」

「場所は喉の奥だと思うよ。頭蓋骨の保護がない分、直線距離ならつむじより『脳』に近い場所だしね。そして滅多に人に見られず、それ以上に人に触れさせない部分。だからそこに紋章マークが一文字刻まれているはずだよ」

インテックスが言つ。

「ありがとう、じゃあインテックス。口を開けてくれるか?」「わかった」

上条は一度だけ目を細めると、意を決してさらに少女の口の中に手を突っ込んだ。

ぬるり、と。それ自体が別の生き物のように蠢く口の中に指が滑り込む。

異様なほど熱を帯びた唾液が指に絡みつく。

上条は不気味とも言える舌の感触に一瞬ためらつてから、インテックスの喉を突くように、一気に指を押し込んだ。

ぐつ、と強烈な吐き氣にインテックスの体が大きく震えた

ような気がした。

パチン、と静電気が散るような感触を上条は右手の人差し指に感じると同時に、

バギン! と。上条の右手が勢い良く後ろへ吹き飛ばされた。

「がつ…………!?」

ぱたぱた、と一布団や畳の上に血の珠がいくつも落ちる。

まるで一拳銃で手首を撃たれたような衝撃に、上条は思わず自分の右手を見た。

ボタボタと音を立てて鮮血が畳の上へ落ちていく。

そして、顔の前へ持ってきた右手の、そのさらに向い。

ぐつたりと倒れていたはずのインテックスの両目が静かに開き、

その眼めは赤く光っていた。

それは眼球の色ではない。

(まづい……ツー！)

眼珠の中に浮かぶ、血のように真っ赤な魔法陣の輝きた
(ますい……ツー！)

ゴツ！－！という凄

本棚を作つてゐる木の板がまとめて爆ぜ割れ、バラバラと大量の本
が落ちる音が響く。

ガチガチと震え、ともすれば崩れ落ちてしまいそうな両足で上条はかろうじて起き上がる。

口の中に溜まつた唾の中に、鉄臭い血の味が混じつていった。

「 警告、第三章第一節。Index - Librorum - Prohibitionorum 禁書目録の『首輪』、第一から第三まで全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生是不可能、現状、一〇万二〇〇〇冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

口の中に溜まつた唾の中に、鉄臭い血の味が混じつていた。

アドバイスお願いします

幻想を殺したヒーロー

上条は、目の前を見る。

インデックスは、まるで骨も関節もないかよつた不気味な動きでゆつくりと立ち上がる。

その両目に宿る真紅の魔法陣が上条を射抜く。

それは眼であって、目ではない。

そこに人間らしい光はなく、そこに少女らしいぬくもりは存在しない。

(魔力がないから、私には使えないの)

「……、そういうやあ、一つだけ聞いてなかつたっけか」

上条はボロボロの右手を握り締めながら、口の中で小さく言った。「超能力者でもないテメエが、一体どうして魔力がないのかつて理由」

その理由が、おそらくこれだ。

教会は二重三重の防御網セキゴリティを用意していた。

もし仮に、だれかが『完全記憶能力』の秘密について知り、『首輪』を外そうとした場合。

インデックスは自動的に一〇万三千〇〇〇冊の魔道書を操り。

その『最強』とも言える魔術を使って、文字通り真実を知った者の口を封じる。

その自動迎撃システムを組み上げるために、インデックスの魔力は全てそこに注ぎ込まれてしまつたのだ。

『『書庫』内の一〇万三千〇〇〇冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。

該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術ロカルを組み上げます」

インデックスは、糸で操られる死体のように小さく首を曲げて、

「 侵入者個人に対しても最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

バギン！ とすさまじい音を立てて、インデックスの両目についた二つの魔法陣が一気に拡大した。

インデックスの顔の前には、直径一メートル強の魔法陣が二つ、重なるように配置してある。

それは左右一つずつの眼球を中心に固定されているようで、インデックスが軽く首を動かすと空中に浮かぶ魔法陣も同じように後を追つた。

「 。 、 」

インデックスが何か もはや人の頭では理解できない『何か』を歌う。

瞬間、インデックスの両目を中心としていた二つの魔法陣がいきなり輝いて、爆発した。

ただし、それは青白い火花ではなく、真っ黒な雷のようなものだつた。

全く非科学的な事を言つて申し訳ないが、それは空間を直接引き裂いた亀裂のようなものに見えた。

バギン！ と。

二つの魔法陣の接点を中心に、ガラスに弾丸をぶち込んだように、空気に真っ黒な亀裂が四方八方へ、部屋の隅々まで走り抜けていく。まるでそれ自体が何人たりともインデックスに近づけまいとする、一つの防壁であるかのように。

めき……、と。何かが脈動するように、亀裂が内側から膨らんでいく。

わずかに開いた漆黒の亀裂の隙間から流れ出るのは、獸のような匂い。

「あ、」

上条は、唐突に知つた。

本能に近い部分が叫んでいる。あの亀裂の中にあるものが『何か』は知らない。

だが、それを見たら、それを真正面から真正直に直視したら。たつたそれだけで上条当麻という一存在は崩壊してしまう、と。

「。は」

上条は、震えている。

どんどんどんどん亀裂が広がっていき、その内側から『何か』が近づいてきている事を知つても。

上条は動けない。震えている、震えている、本当に震えている。だつて、なぜなら。

よつは、『それ』さえ倒してしまえば。

他の誰でもない、自分自身の手でインテックスを助け出す事ができるのだから。

「あははははははははははははははははははははははははははははははははは！」

だから、上条は歓喜に震えていた

恐い？ そんなはずはない。だって、ずっと待っていたんだから。神様の奇跡すら打ち消せると書いておきながら、不良からは逃げるしかなく、テストの点が上がる訳でもなく、女の子にモテたりする事もない、こんな役立たずな右手を持つて。

それでも、自分のせいで一人の女の子の背中が斬られた時。

自分の無力感を呪いながら、それでもたつた一人の女の子を助けたいと、ずっと願っていたんだから！

別にこんな物語の主人公になりたかった訳じゃない。

ただ、こんな残酷すぎる物語さえ打ち消し、引き裂くほどの力が右手に宿っているんだから！

たつた四メートル。

もう一度、あの少女に触れるだけで全てを終わらせる事ができるのだから！

だから、上条は『亀裂』へ その先にいるインデックスの元へと走った。

そのまま右手を握り締めて。こんな残酷な物語の、無限に続くつまらない結末を打ち消すために。

同時に、ベギリ と、亀裂が一気に広がり、『開いた』。ニコアーンスとしては、処女を無理矢理引き裂いたような痛々しさ。そして部屋の端から端まで達するほど巨大な亀裂の奥から、『何か』が覗き込んで、

「ゴツー！」と、亀裂の奥から光の柱が襲いかかってきた。

もうたとえるなら直径一メートルほどのレーザー兵器に近い。太陽を溶かしたような純白の光が襲いかかつてき瞬間、上条は迷わずボロボロの右手を顔の前に突き出した。

じゅう、と熱した鉄板に肉を押し付けるような激突音。だが、痛みはない。熱もない。まるで消防ホースでぶち撒かれる水の柱を透明な壁で弾いているかのように、光の柱は上条の右手に激突した瞬間、四方八方へと飛び散つていく。

それでも、『光の柱』そのものを完全に消し去る事はできない。まるでスタイルの魔女狩りの王のように、消しても消してもキリがない感じ。

置につけた両足がじりじりと後ろへ下がり、ともすれば重圧に右手が弾き飛ばされそうになる。

（違う……これは、そんなもんじゃ…………ツー？）

上条は思わず空いた左手で吹き飛ばされ、その右手の手首を掴む。右手の掌の皮膚がビリビリと痛みを発した。魔術が食い込んできている。

右手の処理能力が追いつかず、ジリジリとミリ単位で光の柱が上条の方へと近づいてきているのだ。

(単純な『物量』だけじゃねえ……ッ！ 光の一粒一粒の『質』がバラバラじゃねえか……！)

ひょっとすると、インデックスは一〇万三〇〇〇冊の魔道書をもつて、一〇万三〇〇〇種類もの魔術を同時に使っているのかもしれない。

一冊一冊が『必殺』の意味を持つ、その全てを使って。

何かを叫びかけたスタイルは、けれど途中で背中を殴られたように息を詰ませた。

目の前にある光の柱 そしてそれを放つインデックスを眺めて心臓が止まつたような顔をしている。

神裂かみさきが……あれだけ孤高で最強に見えた神裂が、目の前の光景に絶句していた。

「……ど、『竜王の殺息』って、そんな……」

上条は振り返らない。

振り返るだけの余裕がないのも事実だつたし、もう現実から目をそらすのは嫌だった。

「おい、光の柱が何だか知つてんのか！」だから、振り返らないまま叫ぶ。

「コイツの名前は？ 正体は！？ 弱点は！？ 僕はどうすれば良い、一つ残らず全部まとめて片つ端から説明しやがれ！！」

一人の魔術師は、呆然と亀裂きれつの向こう インデックスの方を見たようだった。

「『聖ジョージの聖域』は侵入者に對して効果が見られません。他の術式へ切り替え、引き続き『首輪』保護のため侵入者の破壊を継続します」

それは間違いなく一人の魔術師の知らないインデックスだつただろう。

それは間違いなく教会に教えられなかつたインデックスだつただろう。

「……、」

スタイルはほんの一瞬、本当に一瞬だけ、奥歯が砕けるほど歯を食いしばつて、

「Fortis931」

そう言ひ。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！

スタイルの修道服の胸元が大きく膨らんだ瞬間、内側からの力でボタンが弾け飛んだ。
轟！ という炎が酸素を吸い込む音と同時に、服の内側から巨大な炎の塊が飛び出した。

「魔女狩りの王で時間を稼ぐ！早く行け！さつさと彼女を救つてこい！上条当麻ッ！」

魔女狩りの王が上条に背を向け竜王の殺息に立ちはだかる。
だが、圧倒的に竜王の殺息が優勢だ。魔女狩りの王は押されている。
「チッ！レベルが違う！もう持たないぞ！」

「Salvare000…！」

上条は神裂の叫び声を聞いた。それは日本語ではない、聞き慣れない言葉。

けれど、似たような言葉を　いや、名前を上条は一度だけ聞いた事がある。

学生寮で、ステイルと対峙した時。
彼が『魔法』を使う時に必ず名乗るものだと言った　『魔
法名』。

神裂の持つ、二メートル近い長さの日本刀が大気を引き裂いた。
七本の鋼糸^{ワイヤ}を用いる『七閃』が音を引き裂くような速度でインデックスの元へと襲いかかる。

だが、それはインデックスの体を狙うものではない。

インデックスの足元　　脆い置^{もろ}を七本の鋼糸^{ワイヤ}が一気に切り裂いた。

突然に足場を失った彼女はそのまま後ろへ倒れ込む。

インデックスの『眼球』と連動していた魔法陣が動き、魔女狩りの王^{ウス}を狙つていたはずの光の柱が大きく狙いを外す。
アパートの壁から天井^{てんじょう}までが一気に引き裂かれた。

夜空に漂う漆黒の雲までが引き裂かれる。

ひょっとすると大気圏の外にある人工衛星まで引き裂かれたかもしれない。

引き裂かれた壁や天井は、木片すら残さない。

代わりに、破壊された部分が光の羽と同じく純白の光の羽となつた。はらはら、と。

どんな効果があるかも分からぬ光の羽が何十枚と、夏の夜に冬の雪のように舞い散る。

「それは『竜王の吐息』　　伝説にある聖ジヨーヌのドラゴンの一撃と同義です！　いかな力があるとはいえ、人の身でまともに取り合おうと考えないでください！」

「ダメです

上…」

全てを引き裂くような神裂の叫び声。

もつ手を伸ばせばインデックスの顔の前にある魔法陣に触れられる、と思つた矢先だつた。

上条は足を止めず、そのまま上を、天井を見る。

光の羽。

インデックスの『光の柱』が壁や天井を破壊した後に生まれた、何十枚もの光り輝く羽。まるで粉雪のようにゆっくりと舞い降りてきたそれが、今まさに上条の頭上へ降りかかるうどしていた。

魔術を知らない上条でも何となく分かる。

それが、たつた一枚でも触れてしまえば大変な事になる事ぐらい。

そして、何十枚もの羽は、やはり上条の右手を使えば簡単に打ち消す事ができる事も。

だが、

「警告、第二二章第一節。炎の魔術の術式を逆算に成功しました。曲解した十字教の教義モチーフをルーンにより記述したものと判明。対十字教用の術式を組み込み中……第一式、第一式、第三式。命名、『一神よ、何故私を見捨てたのですか』《エリ・エリ・レマ・サバクタニ》『完全発動まで十一秒』」

『光の柱』の色が純白から血のように赤い真紅へと変化していく。魔女狩りの王の再生スピードがみるみる弱まっていき、『光の柱』へと押されていく。

何十枚もの光の羽を一枚一枚右手で撃ち落としていたら、おそらく時間がかかりすぎる。インデックスに体勢を立て直される恐れもあるし、何より魔女狩りの王がそれまで保たないと思つ。

頭上には何十枚と舞う光の羽、

足元にはたつた一つの想いすら利用され、糸で操られる一人の少女。

どちらかを救えれば、どちらかが倒れるといつ、たつたそれだけのお話。

もちろん、答えなんて決まつていた。

この戦いの中、上条当麻は自分の身を守るために右手を振るつていた訳ではない。

ただ、たつた一人の女の子を助けるために、魔術師と戦つていたんだから。

(この物語が、神様の作った奇跡の通りに動いてるつてなんら)

)

上条は握つた拳の五本の指を思い切り開く。
まるで掌底しょうていでも浴びせるように、

(まずは、その幻想をぶち殺す!—)

そして、上条は右手を振り下ろした。

そこにある黒い亀裂、さらにその先にある亀裂を生み出す魔法陣。

上条の右手が、それらをあつさりと引き裂いた。

本当、今まで何でこんなものに苦しめられていたのか笑いたくな
るほどだ。

あつさりと、水に濡れた金魚すくいの紙ぬのでも突き破るよつこ。

「 警、こぐ。最終……章。第、零ぜろ……。『首輪、』致

命的な、破壊……再生、不可……消」

ブツン、とインデックスの口から全ての声が消えた。

光の柱も消え、魔法陣もなくなり、部屋中に走つた亀裂が消しゴムで消すように消えていき、

その時、上条当麻の頭の上に、一枚の光の羽が舞い降りようとした。

上条はその瞬間だれ、誰かの叫び声を聞いたよつな気がした。

それがステイルか、神裂かみさきか、あるいは自分自身の声なのか、
田を覚ました（かもしれない）インデックスの声だったのか、それ
すらも上条には分からなかつた。

ただひとつ、鮮明に響いた叫び声があつた。

「貫けエ！！」

それは、神裂を手駒に取った男の声だった。いつも冷静沈着なはずの男の声。

「光帶収束砲ツ！」

パキンッ！と音が鳴り、光の羽が碎ける。上条は顔を上げて状況を見る。

「無茶してんじゃねえよ。バカ」

上条の頭上にある光の羽が一瞬で真紅の炎で埋め尽くされる。それは、まるで生き物のように部屋の中を這いまわり、部屋の中にある光の羽を焼きへ焼いた。

その時、上条は術者を見た。顔はスティーラを知るはしたよ二な感じ

上条の意識は落ちていつた

アドバイスお願いします

「師匠？」

なぜ？ 師匠は今までどこく？ 弟子の僕に何も言わずに…あれ？ だんだん腹が立つてきたぞ？

よし、師匠には罰を与えよう。 行け！ 不意打ちイノケンッ！！！ 「行け。 魔女狩りの王」

「そんなモンか？」 桜火。

花びらの形をした炎が竜巻状になつて魔女狩りの王に襲いかかる。

「つ！..。上級魔法はセヨいですよ師匠！」

「つるせえ！ てめえは法王級の魔術つかつてんじゃねえか！」

「はあ、そこまでです。 豪水破裂

物凄い勢いで水が降り注ぐ。

桜火は中和され、魔女狩りの王は碎かれた。

「つ！..！」

「チツ！」

「そんなことやつてないで、こつからは仲間としてやつてくれんですから」

それに対する反応は唖然とした。

豪水破裂は中級魔法だ。 つまり、上級魔法と法王級魔法を中級魔法で相殺したのだ。

しかもそのあとの言葉がびっくりだ。『こつからは仲間としてやつてくれんですから』だと？

「ちよつと待て！ いつ僕がお前の仲間に『ステイル、俺たちの仲間にね』 師匠！？

そう言うといきなり神裂と僕に紙を渡してくる。

「僕達の組織名と目的です。 それでは」

そう言って虚空へと消える。

「何だったんですか？ あの人たちは」

「分からぬ。ただ、敵なら厄介、味方なら全世界を相手に喧嘩を売つても勝てるね」

紙を見ながらスタイルが答える。

「全世界を相手に喧嘩を売つても勝てる?」

「その通り。最も強く、最も小さく、そして最も活動しない魔術組織

」

渡された紙にはこう書いてあつた。

- ・組織名…光求む者の標ひょう
- ・目的…誰もが望むハッピーエンドを作ること

「何もないね？」

大学病院の診察室で、小太りの医者はそう言つた。

回転椅子の上でくるくる回つてゐる医者は、自分がカエルに似ている事を自覚してゐるのか、胸元のIDカードに小さなアマガエルのシールが貼り付けてある。

博愛・王義なインデックスだったが、科学者だけは嫌いだつた。魔術師も変人ぞろいと言えばその通りだが、科学者はその上を行くと思う。

何でこんなヤツと一人つきりなんだと思うが、連れはいないのだから仕方がない。

連れは、いないのだから。

「患者さんでもない人に敬語を使うのもどうかと思うのでやめておくよ？」コイツは医者として君に贈る最初で最後の質問なんだけど、君は「一体病院に何しに来たんだい？」

そんな事は、インデックスにだつて分からぬ。

本当に、誰も。誰だつて、本当の事は教えてくれなかつた。

いきなり、今まで一年周期で記憶を消されてきたとか、その忌まわしい循環から救い出すために一人の少年が命を賭けたとか、敵だと思つてた魔術師からそんな事言われても困る。

「それにつけても、学園都市にIDを持たない人間が三人もいたとはね？」謎の闪光に監視用の衛星が一基撃ち抜かれたそuddi、今ごろ風紀委員はてんてこ舞いだね？」

それじゃ最初で最後の質問になつてない、とインデックスは思う。IDを持つていらない人間が三人……一人はインデックス。残る二

人はあの魔術師達だらう。

今まで散々人を迫り回してたくせに、人を病院に運ぶとさつさとどこかへ行ってしまった。

「ところで、その手にある手紙は彼らから贈られたものだよね？」
カエル顔の医者はインデックスの持っている、ラブレターでも入つてそうな封筒を見る。

インデックスはムツとして、ビリビリと強引に封筒を破つて手紙を取り出した。

「つとつと？ それは君宛ではなくあの少年宛のものだと思つけど？」

いいんです、とインデックスは不機嫌そうに答えた。
大体、差し出し人が『炎の魔術師（スタイル＝マグヌス）』で『親愛なる（Dear）上条当麻へ』となつてゐる時点で怪しきる。封筒に貼り付けられたハートのシールに殺氣じみた悪意さえ感じてしまう。

ちなみに手紙には、

『挨拶は無駄なので省かせてもらつよ。

まったくよくもやつてくれたなこの野郎と言いたい所だけど、その個人的な思いの丈をぶつけてしまつと世界中の木々を残らず切り倒しても紙が足りなくなるのでやめておくよこの野郎』

こんな感じの便箋（ひんせん）が八枚もあった。

インデックスは無言で一枚一枚グシャグシャと丸めて後ろへポイポイ投げ捨てる。

自分の仕事場を汚されていく医者のカエル顔がどんどん困り顔になつていくが、泣く寸前のいじめられっ子みたいな妙な威圧感を全身から放つインデックスに何も言つ事ができない。

と、九枚目 最後の便箋にこんな事が書いてあつた。

『とりあえず、必要最低限の礼儀として、手伝つもらつた君にはあの子と、それを取り巻く環境について説明しておく。あとあと貸

し借りとか言われても困るしね。

科学者だけでは不安なので、医者のいない間に魔術師もあの子の事を調べてみたけど、問題はなさそうだ。

上のイギリス清教の下した判断は、表向きなら『首輪』の外れたあの子を大至急連れ戻すようにって感じだけど、実際には様子見というのが正しいかな。

僕個人としては、一瞬一秒でもあの子の側に君がいる事は許せないんだけど。

教会が用意した自動書記とはいえ、あの子は一〇万三〇〇〇冊の魔道書を用いて魔術を使った。そして、自動書記そのものが破壊された今、あの子は自分の意思で魔術使えるかどうか。

もし仮に、自動書記を失った事で『あの子の魔力が回復した』のなら、僕達も態勢を整えないといけない。

まあ、魔力の回復なんてありえないとは思つけど。注意するに越した事はない、って所だね。

一〇万三〇〇〇冊を自在に操る『魔神』ってのはそれぐらいの危険があるって事かな。

それとP・S・Cの手紙は読み終わると同時に爆発するようにしておいた。真相に気づいたとはいえ、勝手に「賭け」に出た罰だ、その自慢の右手、指一本ぐらいう吹つ飛ばしておきたまえ』

なんて書かれた挙げ句、手紙の最後にスタイルお得意のルーン文字が刻んであった。

慌てて手紙を放り捨てると同時に、クラッカーミたいな破裂音と共に手紙が粉々に弾け飛ぶ。

「なかなか過激なお友達だね？」うん、液化爆薬でも染み込ませてあつたのかな？」

そこで驚かない医者も相当にぶつ飛んでる、とインデックスは半分以上本気で思う。

けれど、インデックスも感情が麻痺しているのか、それ以上の考

えは浮かばない。

だから、ただ病院へやつてきた目的を果たす。

「あの少年の事なら、直接会つて確かめた方が早い……と言いたい所だけね？」

力エル顔の医者は、本当に面白そうに言つた。

「本人の前でショックを受けるのも失礼だから、手つ取り早くレッスンワンだね？」

「こんこん、と病室のドアを一回ノックした。
たつたそれだけの仕草に、インデックスは心臓が破裂しそうになる。

返事が返るまでの間にそわそわと掌についた汗を修道服のスカートでごしごし拭いて、ついでに十字を切つた。

はい？ と少年の声が返ってきた。

インデックスはドアに手をかけた所で、はい？ と言われたからにはここで『入つて良い？』と聞くべきかと迷つた。
けれど逆にしつこい野郎ださつさと入つてくりや良いのにとか思われるのもなんか恐い。すごくすごく恐い。

ギクシャクと口ボツトみたいにドアを開ける。

六人一部屋の病室ではなく、一人一部屋の個室だった。

壁も床も天井も白一色のせいか、距離感がズラされて妙に広く感じられる。

少年は真っ白なベッドの上にいて、上半身だけ起こしていた。

ベッドの側の窓は開いていて、ひらひらと真っ白なカーテンが揺らいでいた。

生きていた。

たつたそれだけの事実に、インデックスは涙がこぼれるかと思つた。

今すぐ少年の胸に飛びつくべきか、それともあんな無茶をした事にまず頭を丸かじりするべきかちょっと迷う。

あの……、と頭にハチマキみたいに包帯を巻いた少年は、小さく首を傾げて、言った。

「あなた、病室を間違えていませんか?」

少年の言葉はあまりに丁寧で、不審そうで、様子を探るような声だった。

まるで、顔を見たこともない赤の他人に電話で話しかけるような声。

「……、っ」

インデックスは、小さく息を止める。視線が、どうしても下を向く。

超能力者が無理矢理に力を使い続けた反動、そしてインデックス自身が放った（らしい、はつきり言って彼女は全く覚えていない）光の攻撃は、一人の少年の脳を深く傷つけていた。

それが物理的な つまりただの『傷』ならば、背中を斬られたインデックスの時と同じく回復魔法でどうにかなるかもしれない。だが、透明な少年には幻想殺イマジンブレイカという名の右手があった。

それは、モノの善悪を問わず、あらゆる魔術を打ち消してしまうのだ。

つまり、少年を治そうとしても、その回復魔法さえ打ち消されてしまう。

ある少年は、身体からだではなく精神じいじゅが死んだという、たったそれだけのお話。

あのう? という、不安そうな、否、心配そうな少年の声。

インデックスはなぜか、透明な少年がそんな声を出すのが許せなかつた。

少年は自分のために傷ついた。なのに、少年が自分の事を心配するなんて、そんなのすごい。

インデックスは胸に込み上げる何かを飲み込むように息を吸う。

笑う事は、できたと思つ。

少年はどこまでも透明で、インデックスの事なんて少しも覚えていなかつた。

「あの、大丈夫ですか？ なんか君、ものすげく辛そうだ」
なのに、透明な少年は一発で完璧な笑顔を打ち碎く。

そう言えど、この少年はいつも笑顔の裏に隠れた本音を覗き込もうとするのだった。

「ううん、大丈夫だよ？」インデックスは、息を吐きながら、「大丈夫に、決まってるよ」

透明な少年はしばらくインデックスの顔を眺めていたが、「……。あの、ひょっとして。俺達って、知り合いなのか？」

その質問こそが、インデックスには一番辛い。

それはつまり、透明な少年は自分の事など何も分かつていないという詐欺なのだから。

何も。本当に、何も。

「うん……、と。インデックスは、ポツンと病室の真ん中に立つたまま、答えた。

まるでマンガに出てくる小学生が宿題を忘れて廊下に立たされるような、そんな仕草だった。

「どうま、覚えてない？ 私達、学生寮のベランダで出合つたんだよ？」

「俺、^{おれ}学生寮なんかに住んでたの？」

「……どうま、覚えてない？ どうまの右手で私の『歩く教会』が壊れちゃつたんだよ？」

「あるくさようかいつて、なに？」『歩く協会』……散歩クラブ？

「どうま、覚えてない？ どうまは私のために魔術師と戦つてくれたんだよ？」

「どうまって、誰の名前？」

インデックスの口は、あと少しで止まつてしまいそうだった。

「どうま、覚えてない？」

それでも、これだけは聞いておきたかった。

「インデックスは、どうまの事が大好きだつたんだよ？」

「ごめん、と透明な少年は言った。

「インデックスって、何？ 人の名前じやないだらうから、俺、犬か猫でも飼つてるの？」

うえ……、と。インデックスは『泣き』の衝動が胸の辺りまでせり上がつてくる。

けれど、インデックスは全てを噛み殺し、飲み込んだ。
飲み込んだまま、笑う。完璧な笑みとはほど遠い、ボロボロの笑顔にしかならなかつたけど、

「なんつてな、引一つかかつたあ！ あつはつはーのはーつ！！」

はえ……？ とインデックスの動きが止まった。

透明な少年の不安そうな顔が消えていく。
まるでぐるんと入れ替わつたように犬歯剥き出しの、超邪悪な笑みが広がつている。

「犬猫言われてナニ感極まつてんだマゾ。お前はあれですか、首輪趣味ですか。ライライ俺あこの歳で幼女監禁逮捕女の子に興味があつたんですエンドを迎えるつもりはサラサラねーぞ」

透明な少年には、いつの間にか色がついていた。

インデックスには訳が分からぬ。

幻覚かと思つて両目をごしごし擦り、幻聴かと思つて小指で耳の穴をほじつてみる。

何だかサイズがぴったり合つてるはずの修道服の肩が片方ずるつとずり落ちてゐるような錯覚に陥る。

「魔術を受けて記憶がトんだんじや……」

「……なんか忘れてた方が良かつたみてーな言い方だなオイ」

上条はため息をついて、

「おまえには俺が最後の最後、自分で選んで光の羽を浴びたよ！」

見えたんだよな

「よしに、見えた？」

「そ、魔術つて便利だね。そんな幻覚を植え付けちゃうなんて」「もしかして、記憶操作？」

そういうと上条は、

「だ、いせーいかーい！その通り。オレがあの男とカエルの医者に頼んだら快く引き受けてくれたよ。タネ明かしの時に本当の記憶が流れるように魔術を組んだらしいぜ」

その言葉と同時、映像が頭の中に流れてくる。
あ、とインデックスは思わず声に出してしまった。

呆然と、ただ呆然と。

床の上でぺたりと女の子座りしたインデックスは上条の顔を見上げた。

断言できる、絶対修道服の肩はずり落ちてる。それぐらい間抜けな顔になつていて。

「それにしたつてお前の顔つたらねーよなー。普段さんざん自己犠牲で人を振り回してたお前の事だ、今回の事でちつたあ自分見直す事できたんじゃねーの？」

……、インデックスは何も答えない。

「つて、あれ？……あのー」

一上条はさすがに不安になつてちよつと声のトーンを落としてみる。

インデックスの顔がゆつくりと俯いていいき、長い銀色の前髪で表情が隠れる。

女の子座りで肩が小刻みにぶるぶる震えている。何だか知らない

けど歯を食こしじまつてゐる。

果てしなく嫌なトーンに、上条は思わず探りを入れてみた。

「えっと、一つお尋ねしたいんですが、よひじこで『』がどこですか姫

なに? テクスは答える。

「あの、もしかして……本気で怒つて、ます?」

頭のてつぺんを思いつきり丸かじりされた少年の絶叫が病棟中に響き渡る。

ふんふん、という擬音^{ぎおん}が似合いそうな動きでインテックスは病室を出て行つた。

おっと？ という声が入口の辺りで聞こえる。

どうやら入れ替わりに入つてこようとしたカエル顔の

してきたインテックスとぶつかりそうになつたらしい。

二三

少年はベッドから上半身だけずつ落ちて、頭のひらべんを両手で押さえて泣いていた。

死ぬ、これはホントに死ぬ、という独り言がなんかリアルで恐い。
じつはまた日常は始まる。

- - - - -

アドバイスお願いします

登場

学園都市には窓のないビルがある。

ドアも窓も廊下も階段もない、建物として機能しないビル。空間移動を使わない限りは出入りも出来ない密室の中心に、巨大なガラスも円筒器は鎮座していた。

その巨大な強化ガラスの円筒の中には赤い液体が満たされている。広大な部屋の四方は全て機械類で埋め尽くされ、そこから伸びる数千万ものコードやチューブが床を這い、中央の円筒に接続されていた。

窓のないその部屋はいつも闇に包まれていた。

ただし、円筒を遠巻きに取り囲む機械類のランプやモニタの光がまるで夜空の星のように瞬いている。

赤い液体に満たされた円筒の中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さまに浮かんでいた。

学園都市統括理事長『人間』アレイスター。

それは男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも囚人にも見える。その『人間』は自分の生命活動を全て機械に預けることで、計算上ではおよそ千七百年もの寿命を手に入れていた。脳を含め全身はほぼ仮死状態に近く、思考の大半も機械によつて補助している。

(・・・・、さて。そろそろか)

アレイスターがそう思った瞬間、タイミングを合わせたかのよう

に円筒の正面に、唐突に二つの影が現れた。

一人は小柄な空間移動能力者の少女、そしてもう一人は彼女に工スコートされるように手をつないだ大男だ。

空間移動能力者は一言も言葉を発しないまま会釈をすると、再び虚空へ消える。

闇の中には大男だけが取り残された。

その大男は短い金髪をツンツンに尖らせ、青いサングラスで目線を隠した少年だった。アロハシャツにハーフパンツという、こんな場所にそぐわない格好をしている。

土御門元春。^{（つちみかどもとはる）}イギリス清教の情報をリークする学園都市の手駒だ。

「何で学園都市に光求^{（あいつら）}む者の標が居るんだ！」

土御門^{（ウチ）}は声を荒げた。

学園都市に来たのは必要悪^{（ネセサリウス）}の教会なんてレベルの魔術結社

組織

じゃないのだ。

「心配するな。何せ、彼らを招待したのは私だからな」「招待した？」

土御門は怪訝そうに眉をひそめる。すると、アレイスターは懐かしむような遠い目をして言った。

「光求^{（あそこ）}む者の標のリーダーとは友達でな」

そこまで言つと、急に怯えたような顔になり、か細い声で言つた。

「私の師なのだよ」

土御門は純粋に驚いていた。どんなイレギュラーも自分の計画に取り込み、対処する。

天使など眼中に無いような素振りさえ見せる。そんなアレイスターが今でも恐怖する師は誰なのか。少し会つて見たもある。

「会つてみたいですか？」

土御門は後ろから突然声がしたのに驚き、反対方向に飛び退く。静かに、そして気取られぬよう臨戦態勢に入る。

「土御門、彼は味方だ。というか彼が私の言った友達だよ」少し幼い顔つき。身長は180cmもないだろう。せいぜい170後半だ。

肩に届くか届かないかといった所まで伸ばした髪。黒髪、黒目で服装はローブを着崩して着ている。

簡単に言うと超イケメン。絶世の美男子と言つて差し支え無いであろう。

「久しぶりだな。アレイスター」

「ホントだな。何十年、いや、何百年ぶりだ? カール

二人とも仕事用のような敬語から口調を崩している。要するにタメ口だ。

土御門は珍しいものを見るような目で見ていた。

あんなに堅苦しい力チカチアレイスターくんが、タメ口を使つているのだ。だが。

「カール? 光求む者の標のリーダーはカーカスだつたと思ったが?」

「あだ名ですよ。『カーカス・ルーシェクト』略してカール。ちなみに日本国籍も持つてて名前は御剣神哉です」

「で、何しに来たんだ? まさか用も無く来たわけじゃあるまい」

アレイスターが言つ。

「そう。3つの頼みがあるんだ」

「よつぽどの事じや無ければ聞くが?」

「まず、システムスキン身体測定のときはレベル2の身体強化能力つて設定にしてほしい。そして上条さんの居る高校に僕を編入させてほしい。最後に、アレイスターへの連絡、交渉、要請の権限がほしい」

「無論、許可しよう」

その言葉を聞くとカーカスはアレイスターに背を向け

「じゃあな。気が向いたらまた来るよ」「そつとてテレポートで帰つて行つた。

「はあ～、知りたいことが知れたからもういい」

土御門はそう言うと、案内人にエスコートされ、帰つて行つた。一人になつたアレイスターは悪戯を思いついた子供のような表情で呟いた。

「平和に暮らしたいと? そろはいかんよ。カール」
そつとてニヤニヤしながら都市伝説のサイトに行き、とあることを書き込む。

「さて、レベル5の魔さんはどう反応するのかな?」
タンッ。という短い音とともにDeleteキーを押した。

「ははははははははははははははは
ははははははははははははははははは
ははははははははははははははははは

はははははははははははははははははははははははは
ははははははははははははははははははははははは
カーカスは三沢塾のある部屋にテレポートしたら、いきなりこんな
笑いが聞こえたので耳がおかしくなったのかな」とか思つてしまつ
た。その頃、隣の部屋では。

「 倒れ伏せ、侵入者共！」

炸裂する怒号。

瞬間、上条は何十本もの見えない重力の手に全身を押さえつけられ、銃を奪われた銀行強盗みたいに床に組み伏せられた。
侵入者共、という言葉にはスタイルも含まれるのか、視界の隅で赤髪の魔術師まじゅつしが同じく床に叩きつけられるのが見えた。

「う…ッ、が……！」

内臓を丸ごと絞られるような感覚に上条は必死に吐き気を押し殺す。

ギリギリ、と。強力な電磁石に縛られたような右腕を、一ミリ単位で自分の胸元へと引き寄せる。

とにかく右手で自分の体に触れる。

そうすれば記憶を取り戻した時と同じく自由を取り戻せるかもしれない。

「は、はは、あははは！ 簡単には殺さん、じっくり私を楽しませろ！ 私は禁書田録に手をつけるつもりはないが、貴様で発散せねば自我を繋げる事も叶わんからな！」

鍊金術師れいけんじゆしきは懐から髪の毛のように細い鍼はりを取り出す。
震える手でを鍼を首筋に当てるごと、体内のスイッチを押し込むように鍼を突き刺した。

アウレオルスは皮膚ひふに食いつく毒虫を払うよつて、鍼を横合はりいへ投げ捨てた。

まるでそれが攻撃開始の引き金の如く、アウレオルスは上条を睨み、

「待つて」

そこへ、姫神秋沙^{ひめがみあいさ}が立ち塞^{ふさ}がつた。

かつて、上条の盾^{たて}になつた時と全く同じ立ち位置。だが決定的に状況が違う。アウレオルスが固執^{こしつ}していたのは、姫神秋沙ではなく吸血殺しだ。

『目的』であるインデックスが手に入らなくなつた以上、単なる『手段』に気を配る必要などどこにもない ツ！

「ひめ、」

だが、上条は言えなかつた。

姫神の背中は、本氣で心配していた。

上条の事はもちろん、崩れつつあるアウレオルスの事も。決定的に終わつてしまつ前に、どうにか立て直さなければならぬと無言で語つていた。

その背中に、そんな残酷な真実を告げられるはずがない。

「邪魔だ、女」

だが、それこそが失敗。

上条は銃口のようなアウレオルスの両眼を見た。本氣の眼だつた。慌てて右手を動かす。

いや、動かそうとする。止めなければ確実に姫神^{ひめがみ}は巻き込まれる。じりじりと、一ミリ一ミリ床に張り付いた右手を強引^{こういん}に引き寄せて、顔の前まで手繰り寄せる。己の人差し指を喰らうつに、己の歯で必殺の右手に触れる。

バギン、と全身の骨を碎くような音と共に体の自由が戻る。チャンスだ、上条は起き上がる。

あとは姫神を突き飛ばし、アウレオルスを黙^{だま}らせれ

死ね』

その一瞬間。アウレオルス＝イザードの言葉は確かに時間を止め
ていた。
刺殺。絞殺。毒殺。射殺、斬殺、撲殺、博殺、磔殺、焼殺、扼殺、圧殺、轢殺、凍殺、水殺、爆殺。知りうる限りのあらゆる殺人法と照らし合わせて
も、姫神の死因は分からぬ。

傷はなく、出血もなく、病氣ですらもありえない。

ただ、死ぬ。

まるで電池が切れたようだ。

たましい魂、なんてものが本当に存在するのなら、そつくり肉体から魂を抜
き取られて抜け殻になつたようだ。

姫神は、悲鳴すらあげなかつた。

ぐらりと体が揺らぐ。

後ろへ向かつて、仰向けに、つまりは上条に顔を見せるように姫神
が倒れてくる。

ゆつくりと。ゆつくりと。見えなかつた姫神の顔が見えてくる。

姫神は、くしゃくしゃに顔を歪めて笑つていった。

今にも泣き出しそうに、けれど決して涙を見せずに。

それは突然の驚きと衝撃からくるものではない。

あらかじめ覚悟していた、けれど変えられなかつた結末に対する表情だ。

姫神秋沙は、アウレオルスの前に立てばこうなる事を始めから分
かっていた。

それでも、一縷に満たない最後の希望にすがつて、アウレオルス
を止めようとした。

誰にも求められず、最後までモノのように扱われた一人の少女。
鍊金術師が主人公になれなかつたのと同じく、最後までヒロイン
になれないまま、人型の背景を取り除くようにあっさりと死に逝く
事が決定した『吸血殺し』姫神秋沙。

そんなものを。黙つて見ている事など、できるはずがなかつた。

(ふざ)

上条は、もはや鍊金術師の事など視界に入れず、とにかく今にも倒れようとしている姫神秋沙へと飛びかかつた。

何の理由もない。とにかく彼女がこのまま床に倒れたら、『死』という魔術^{まじゅつ}は、もう変えられようのない現実へと決定してしまうような気がしたからだ。

「 つけんじゃねえぞ、テメエ！ ！」

姫神^{ひめがみ}が崩れ落ちる寸前、その体をどうにか両手で抱きかかえる事ができた。姫神の体はひどく軽い。まるで大事なものが、体の中から抜け落ちてしまつたかのように。

腕の中の、奇妙なほど柔らかい少女の体。

だが、弱々しいが確かに鼓動が伝わる。抱き止めた右手を伝つて。「な……我が金色の練成を、右手で打ち消しただと？」鍊金術師の目が凍る。「ありえん、確かに姫神秋沙の死は確定した。その右手、聖域の秘術でも内包するか！」

「 …… 」

上条^{かみじょう}は答えない。

もういい。そんな理屈はどうでもいい。

単なる偶然、奪われた記憶^{きおく}を取り戻した時と同じく、

『死ね』という命令を右手で打ち殺しただけの話なんて、本当にどうでも良い。

上条は、目の前の男が許せない。

同情もした。共感もした。

インデックスに忘れ去られ、それでも大切な彼女を傷つけられなかつたその姿を見た時は、この男を前に拳を握る理由さえ見失つてしまつたような気がした。

だけど、今はもうありえない。

たとえ一番大切な人に目の前で裏切られても、一番大切な人を他の人間に奪われる瞬間しゅんかんを目の当たりにしても。

行き場のない、自分を責める事すらできない怒りに苛まれても。自分の事を、本当に大切に想つてくれた人に対して、その怒りを押し付けて、一人満足しようだなんて思考回路は、絶対に認められない。

上条は、『記憶を失う前の』上条当麻とうまの事が何 つ分からない。どんな思い出を持ち、どんな過去を歩み、どんな想いと共に未来へ進もうとしたのか。

何が好きで、何が嫌いで、一体何を守つてきて、全体何を護つていいこうと思つていたのか。

だけど、これだけは言える。

目の前の鍊金術師。否、この『人間』を 『上条当麻』まつもは認める訳にはいかない。

「いいぜ、アウレオルス＝イザード。テメエが何でも自分の思い通りにできるなら 」

上条当麻は腕の中の姫神秋沙あいさを、ゆっくりと床へ下ろす。そして立ち上がる。

無音に、けれど触れればそれだけで静電気が弾けそうなほど怒りを隠しもせずに、

「 まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す……ッ！…！」

他ならぬ、『幻想殺し』上条当麻の声で、言つた。

鍊金術師は真理を見る

色あせた、しかし確かに広大な空間に立つのは一人。

「……、」

上条は足元で微かに息を繰り返す姫神に視線を向けない。向けられない。

そんな暇はない。彼女は全力をもって、死を賭してまで引き止めたい誰かがいた。

一秒でも彼女の事を思うなら、一瞬でも早く止めるべき人間が上条の視線の先にいる。

直線距離にして一〇メートル強。

言葉一つで思い通りに世界を歪める男を前に、その距離は絶望的とも言えるだろう。

「……、」

それでも上条は一步前へ。

立ち止まる必要はなく、背を向ける必然もない。

ただ巻き込まれたから戦っているのではなく、上条は「」の足で戦場へ向かっていた。

「……、」

故に、言葉はなく、合図もなく。

超能力者と鍊金術師は、互いが互いを倒すために、速やかに一漬し合いを開始した。

「……………
しツ！」

上条は小さく吐息を吐き、アウレオルスの元へ爆発的に駆けようとする。

アウレオルスは何もしない。

ただ懐にある細い鍼を一つ、己の首に打ち込むだけだ。

両者の距離は一〇メートル、気合を入れれば四歩で踏破可能な踏

み込みは、

「 窒息せよ」

しかし、上条が最初の「歩を踏み出した所でいきなりガクンと勢いを失つた。

ギリギリ、と。上条は己の首に鋼鉄の綱じゅうてつつなでも巻きつけられたような苦痛に、思わず体をくの字に折り曲げる。

毒薬を飲んで苦しむ人間のように、自分の右手で自分の首を押さえつける。

アウレオルスに失われた記憶はコレで蘇よみがえり、『死ね』と言われた姫神はコレで死を免れた。

しかし、上条の呼吸は元に戻らない。

まるで喉の奥を瞬間接着剤で固められたように、呼吸ができない。
(落ち着け……、落ち着けッ)

上条はヒューヒューと不明瞭な音ふめいようを立てる己の喉から、食い込んだ右手の指を離す。

(アイツはなんて言つた? ロープで首が絞まる……じゃない。もつと曖昧あいまいに、もつと単純に、息が詰まつて死ねって言つてんじゃねーか……ッ!)

そうして、一度は離した右手の指を、上条は強引いのいにに口の中へと潜もぐり込ませた。

まるで食べた物を畠袋から吐き出そうという動き。

喉の奥に指先が当たり、吐き気が背筋を走り抜けると同時に、バギンとガラスが割れるような音と共に上条の呼吸が元に戻つた。この間、わずか五秒。

しかし、言葉一つを武器にするアウレオルスにとってはまだ遊びを含む五秒間。

アウレオルスは首に突き立つた、髪の毛のように細い鍼はりをつまらなそうに捨て、

「感電死」

鍊金術師が呟いた瞬間、上条の四方八方を青白い電光が取り囲ん

だ。

上条の背筋が凍る前に、空氣を焼く電光の渦は我先にと上条へ殺到する。

(……ツ！？)

とつさに右手を突き出したのは計算しての事ではない。

だが、唯一突き出された右手の先を避雷針にするより、電光は集中した。

右手に触れた電光は猛毒に触れた蛇のようになんで曲をのた打ち回り、けれど静かに消えていく。

(消せる……、)

だが、上条は緊張よりも高揚によつて心臓の鼓動を高めていた。

反して鍊金術師の両目がわずかに細まる。

髪のように細い鍼をさらに一本、首筋に打ち込む。

「絞殺、及び圧殺」

水面のよう波打つ床から何十本ものロープが飛び出した。

一瞬で上条の首をがんじがらめに縛り付けると同時に、同じく波打つ天井から鋸びた廃車が降つてくる。

(消せる……ツ)

だが、上条が右手を振り回すだけで首を締めるロープは水に濡れた紙の帶のように千切れ、頭上に降り注ぐ鋸びた鋼鉄の塊は砂糖細工のように砕けて虚空へ消えてしまう。

アウレオルスは首筋に毒虫でも這われたように、首の鍼を投げ捨てた。

(消せる、できる。コイツの攻撃は右手で回避できる。言葉一つで命令するなら、逆に言えば一度に来る攻撃も一回ずつしかない。冷静に対処すれば怖い敵じゃねえ！)

『言葉』による命令を攻撃方法とするアウレオルスは、逆に言えば言葉を聞いて攻撃を先読みする事もできる。カルタの早取りと同じだ。『感電死』なら、『かんで』の三文字ぐらいで何の攻撃がやつてくるか察知する事ができる。

時間にして一秒にも満たない余裕。

けれど、元々殴り合いに一秒の余裕などない。

ボクシングなら拳は〇・三秒で飛来する。

一発一発の威力は絶大であるものの、アウレオルスの攻撃速度は入間の拳と大差ない。

分かつてしまえば『正体不明』に対する恐怖は拭い去れる。ようは、ガキのケンカにナイフを持ち出す場違いな不良と殴り合うのと同じ事なのだ。

アウレオルスも上条の表情にある余裕を感じ取ったのか、わずかに眉をひそめ、

「なるほど。真説その右手、私の黄金練成アルス・マグナも例の外に洩れず打ち消すらしい」

上条は、余裕を崩さない一鍊金術師の言葉にわずかな疑念を抱き、「ならばこそ、右手で触れられぬ攻撃なら打ち消す事は不可能なのだな？」

上条は、今度こそアウレオルス＝イザードの言葉に凍りつくかと思つた。

「銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出」

鍊金術師は楽しげに細い鍼を己の首筋へ突き立てる。

アウレオルスが軽く右手を横へ振つた瞬間、その手に振りの剣が握られていた。

一見して絵本に出てくる王子様の持つ西洋剣レイピアに見えるが、違う。

剣の锷つばに、大昔の海賊かいぞくが使つていたようなフリントロック銃が埋め込まれた暗器銃だ。

何かが来る　　上条は思わず全身に緊張をみなぎらせ、

「人間の動体視力を超える速度にて射出を開始せよ」
空を裂くようにアウレオルスが西洋剣を横に一閃する　　そう思つた瞬間、火薬の破裂する爆発音が響く。

一瞬遅れて上条の頬ほおを何かが浅く切り、次いで背後の壁に青白く輝く魔弾がぶち当たり、火花を散らす轟音いりゅうおんが炸裂する。

「……！」

簡単な話。剣に仕込んだ銃の引き金を引いた。それだけだ。だが、人間の眼球に飛来する魔弾を捉えるほどの性能を期待するのは酷だろつ。

上条は、右手を構えたまま凍りついていた。
鉛なまりの弾は容易に破壊力はかいりょくが想像できる分、下手な超能力や魔術よりも緊張きんぢょうを走らせる。

魔術や超能力以前の問題として、魔弾は人体には避ける事も防ぐ事もできない『必殺』だ。

アウレオルスは満足そうな顔で首に突き立った鍼を投げ捨て、「先の手順を量産せよ。一〇の暗器銃にて連續射出の用意」唇に言葉を載せた瞬間、アウレオルスの左右一本の手には、それぞれ五丁ずつ計一〇丁もの剣の仕込み銃が、まるで鋼の扇のよう広げて握られていた。

アレが射出されたら最後、上条当麻は絶対に避ける事も防ぐ事もできない。

(逃ゆえげ……ッ！)

故に、上条は射出される前に回避かいくひしようとした。無駄な足掻きと認識しながらも、とつさに横合いに転がりうとして、ふと思つた。

上条の背後かへぎわ すぐ足元にはかるうじて息をする姫神ひめがみが、

ずっと後ろの壁際には倒れて身動きの取れないスタイルがいる。

「馬鹿ばかが！ 何を立ち止まって ッ！」

ギヨツとしたスタイルの叫び声と、

「準備は万端。一〇の暗器銃。同時射出を開始せよ」

アウレオルスの声が響く。だが、

「なに？」

音が響いただけで、何も起こらない。そして、

「甘い。甘すぎますよ」

そんな言葉が上条の正面から響く。知らぬ間に、いや、人に見えない速度で上条の前に現れた。

「あんたは……！」

そこには黒髪の青年が立っていた。白銀の長刀を握っている青年が立っていた。

足元には斬り裂かれた無数の弾丸。アウレオウスはそれを見て言つ。「まさか、全ての魔弾を斬り裂いたというのか……！？」

だが青年はそれを無視して告げる。

「動くな」

その一言だけでアウレオウスの動きを封じる。そう。それはまるで。

「黄金練成か……！？」

しかしその問いには答えず、言葉を紡ぐ。

「我が名は力一カス・ルーシェクト。扉よ、愚かしい鍊金術師に真理を。召喚！」

床から白いナニカが出てくる。それは人型。目と鼻と口があるだけ。真っ白な人の形をしたナニカ。

「顕現せよ。真理」

その言葉と同時に、扉が現れる。10メートルはあらうかといつ大きさ。

白いナニカ

真理

真理と言われたモノは言つ。

「さあ、対価を払わずに事を成そうとした愚かで無力な鍊金術師よ。今までの対価、ぜーんぶ、一括で返してもらうぜ。なあに、真理を

見てやるんだ。世のすべてと言い換えてもいいほど、貴重な情報だ。魂に刻みつけてやるよ。対価はもちろん……」
口が裂けたように笑う。

「テメエの全てだ」

同時に、アウレオウスが扉に吸い込まれる。そして消える。

白いナニカが、扉が、そして、一人の少女の為に自らの全てを賭けた鍊金術師が。

そして沈黙。上条とスタイルがこの日、何百回目かの瞬きをした時。彼は現れた。

いや、居た。まるで最初から居たような、そんな自然さでそこに立っていた。

髪は茶色、オールバックになっている。キリっとした目。

顔はすこしふくらしたように見えるが、面影がある。アウレオウス・イザードの面影がある。

「「つ……」「

スタイルはルーンを取り出し、上条は一步前に出て右拳を構える。アウレオウスの口が動く。上条が右拳を振りかぶるつとする。そして言葉を紡ぐ。

「疑問。ここはどこだ？ そして私は誰だ？ 出来るだけ事細かに教えてくれ

「「……は？」

その問いに応えるべく、カーカスがアウレオウスの目の前まで歩く。

「あなたは記憶を無くしてしまいました」

「どうやらそのようだ。ただ全てを覗たから分かる。どれだけ自分が愚かだったか。あんなのはハッ当たりに他ならない。一人の少女

……その存在が記憶をなくす以前の私にどれだけ大切だったかは痛い程に分かる。だが、あそこまでの非人道的な行為は許せんな。私が自らに課した魔法名……Honos628『我が名譽は世界のために

『。魔法名はこれから自らの指針とし、目的にする。だが、その目的を達成するためには少し時間が必要だ』

上条は啞然としたまま聞く。

恐らく、あのヴィールムとかいうのは、その人間の全てを奪つたんだろう。

記憶を奪つて記憶ではなく知識として入れた。災いが降りからなりように顔を奪い、すりかえた。

奪うのはいけない。悪いことだ。ただ、こんな風にハッピーエンドが見れるなら。

意味のある略奪は罪にはならないんじやないか？なんていう風に思えてくる。

「だから」

そう言って上条とステイルとカーカスの方に向く。

「だからそれまでの間、私が意味と目的を見つけ、一人で魔法名を実現できるまで、仲間で　いや」

こんなハッピーエンドになれるなら。

「　友で居てくれないか？」

RPGのラスボスがパーティになつてもいいんじやないかと思つ。
アウレオウス
友達

姫神とインデックスを連れて三沢塾を出る。

二人に事情を話すと二人とも納得してくれたようで、アウレオウスは晴れて俺達の友になつた。

「そう言えばアウレオウスって家どうするんだ？」

「む？宿か？」

「まさかオレの家に泊まるなんてことは無いよな」

「ククク。心配するな、当麻に迷惑はかけんよ。金はあるのだ。ホテルでも探せばいい

「だけど金が無くなつた」「はあ、上条当麻。君は全く以つてバカ

だね」「は？」

スタイルが言つ。

「彼は学園都市でトップシェアを誇る進学塾の理事長だよ？無駄な浪費をしなければ億万長者にだってなれる。今までインテックスのことや姫神秋沙のことでの金をいっぱい使ってたけれど…それでさえ貯蓄が出来ているんだ。そこらへんのホテルにずっと泊まってたって金は溜まるよ。こぞとなれば理事長室で寝泊まりすればいいしね」

そして、その時路上で○△状態になつてゐる上条が居たとか居なかつたとか……。

オリキャラ設定

名前：カーカス・ルーシェクト

日本名：御剣 神哉

偽名1：アラン・シェイド

偽名2：キーリ・アルスト

日本偽名：雨霧 あまさり 迅 じん

フルネーム：カーカス・ド・ヴァンルート・アインス・エル・ルーシエクト

あだ名：カール、アーシュ、アルス、ジン、コウヤ

特徴：黒髪黒目。めちゃめちゃイケメソ。TOD2のリオンの田を優しくした感じ。

性格：基本的に善人。誰にでも手を差し伸べる。温和。ボケでもツッコミでもOK。

能力：元からある能力は『絶対強者』ヒューマン・オブ・ヒューマン。

進化、適応、不老不死、才能、魔眼、の五つが付いている。

進化：物体。能力。生物に関わらず進化をさせることができる。
例 馬をペガサスに等。

適応：あらゆるものに適応する能力。

例 4000度の炎に1兆分の1秒で適応してノーダメージ等。

不老不死…そのままの意味。

才能…要するに全ての才能。

例 一度見ただけでその技を使った人間以上の力で行使可能。等。

魔眼…目に映るもの全てを見る事ができ、視界は359度。
要するに、359度の中にあるモノなら原子だらうと暗黒物質だらうと観ることができる。

ちなみに未来線も観れる。透視もできる。見るだけではなく見たものを操作できる。

なのでギアスもできるし、殲滅眼のような事もできる。

『フリーカスタマイズ絶対強者』の能力を使って創った能力が『フリーカスタマイズ完全改造』。

『フリーカスタマイズ完全改造』：自分自身を好き勝手に改造する能力。

例 自分をレベル1の身体能力強化と認識させるようにする等。

常に8つの封印をしている。

最高神が全力で施した封印が一つ目で、全てのスペックが半分ぐらいいに落ちている。

『フリーカスタマイズ七苦の封印術』により残りの49%が封印されている。

名の通り七つの苦しみを与えられる封印術。これで8つ全てです。

傲慢…常に身体に激痛が走る。動けば動くほど痛みは強くなる。

色欲…1日^{ラスト}に全身の神経がランダムに入れ替えられる。

暴食^{グラトニー}… エネルギーの消費量が多くなる。

嫉妬^{エンガイ}… 自分自身だけにかかる重力が1000倍になる。

強欲^{グリード}… 魔力、それに連なる異能の力の素の量と質が10分の1になる。

怠惰^{スロウス}… 身体能力が10分の1になる。

憤怒^{ラース}… 魔力、それに連なる異能の力のコントロールが圧倒的にやりづらくなる。

オリキャラ設定（後書き）

はい。チートになりました。
まあ、最初っからチートにするつもりでいたんですけどね。
今後ともよろしくお願いします。

学園都市統括理事長直々の手講じ（前輪也）

今日はさくらJr.短いです。

学園都市統括理事長直々のお誘い

カーカスはある男と電話を通じて話していた。

学園都市統括理事長なんて仰々しい名を掲げているその男の名はアレイスター・クロウリー。

『明後日、そこにきてくれないか?』

「別に良いが、なんでだ?』

アレイスターは少し溜めてから、

『ひ・み・つ』

「キモチワルツ！－！」

『そんな強く言わなくとも（泣）』

アハハ、と笑ってから言つ。

「だつてキモいんだもーん（笑）』

『鬱だ…死のう』

「死んどけつ』

『ヒドツ！？』

こんな会話をしていた。

- - - - - 2日後 - - - - -

カーカスは指定された地下闘技場のような所に居た。

さつきから明らかにお偉いさんだつたり、目が逝っちゃつてる科学者さんとかが目の前を通つてゐる。

大丈夫か?そんな風に思い思わず頭を抱えたときに寄りかかつていた壁から紙がハラリと落ちた。

画びょうでもとれたんだろ。なんて思いながら壁に貼りなおす。

にしてもイベントの名前が物騒だ。『学園都市レベル5序列決定戦』

なんて。

少し気になつたので読んでみた。すると総当たりでやるやつだ。
そして下の方に田をすべらせると参戦者表が書いてある。それを見た。

……えーっと。何か書いてあるはずのないものが書かれているな。
参戦者表の一一番下の欄に「現序列第0位・御剣神哉」の文字。
ワーオ。じつはうことだったのか。アレイスターには後でO HA
N A S H I E だな。

その時寒気に襲われたアレイスターが居たらしい。

『それではああ！みなさんお待ちかね！レベル5序列決定戦の始まりです！…』

司会者が半ば叫びながら言ひ。

『まずは第一回戦！第7位、削板軍霸 vs 第6位、匿名希望さん』
… どうやら本名は言えない事情があるらしいな。姿勢も怪しげ。
180cm並みの高身長に顔には白の包帯を片田と頭に巻いている。
ピアスをつけていて包帯から青い髪がはみ出している。まあ！なんて怪
しいのでしょうか…！…

『f-i ooga…!…』

その声とともに削板が技を出す。

「根性だ！すごいパークチー！」

衝撃波のような物が飛んでくる。匿名希望さんは関西弁で返す。

「なんやそれ！？」

しかしそういいながら音速で間合いを詰める。

「勘忍な。あんま体力使いたくないんや。加速ッ！」

そのまま鳩尾に拳に入る。亞音速で。

どうやら根性ではどうにもできなかつたようで、そのまま倒れる。

『勝者－匿名希望－』

司会者が高らかに宣言する。

科学者、並びにお偉いさんが沸く。

『次は…』

そう言いながらベジを一枚引く。

『第4位、麦野沈利…おおーなんじー！」で来ました…』
何が？

『噂だけがひとつ歩きして実際は居ないんじゃないか？と言われた
男…』

まさか！あの！

『第0位、御剣神哉！…』

オレですかああ…！　ヤダ、『ワライヨー。トタクナイヨー。な
で…！』

「！」の試合—棄権させてもいいます……

『棄権は認められておりません……』

『試合としてどうかと思いますよ…？それ…！』

すると、麦野さんと思われしき人が居た。

「トタクはいいからやつと始めるぞ。第0位！これで勝てばあた
しが第0位だからねえ」

いいですよ。第0位とか要らないですから。いや、ホントに。
ところが、トーナメントだつたらソックローで負けてお暇できるんで
すけど…。

総当たりじゃあ意味無いよなあ。ふむ、アレイスターも考えたな。
まあいい。

やると決まれば普通に勝ちますか。そっちのほうが手つ取り早いし。

『f.i. おひこ…』

『消し飛べえ…！…』

開始と同時に直径2mはある巨大レーザーを撃つて来た。マジで消
し飛びますよ。コ…。

ドオーン…！…

爆発時の風で砂煙が舞い上がる。

「あー? ホントに消したかな~ん」

麦野は確かに手ごたえを感じた。そして煙が晴れる。そこには…

「うん、そうですね。会心の一撃、しかしノーダメ！！」みた
いな感じですかね？」

「嘘でしょー?」

「ホントですが。何か?」

何食わぬ顔で言つてやつた。

あれはあたしの最高出力よ！？あれを喰らって無傷なんて…！

まあホントの事を言えば最初から済めてたことは気付いてたんですけどね。

止めちゃうなら面白くないですし 大きな失敗をする前にここで心を折つとけばそれを踏み台にして上へ行けるでしょうから。

「僕の能力を知らないからですよ」

「知ってるわよ！身体能力強化なんですよ」

「はい。ただ、普通のとほ少し違いますけどね」

卷之三

麦野は怪訝そうに眉をひそめる。
フリーカスタマイズ

僕の能力は『完全改造』といふて、自分の体を改造する能力です。今のはただあなたの攻撃に耐えられるようにしただけです

「正真正銘の最強ね…」バケモン。降参よ。敵う訳がない！」

カーカスは自嘲的な笑みを浮かべながら、バケモン、か……。と言う

『勝者、御剣神哉ああ！！！』

『勝者、御剣神哉ああ！！！』

会場が一気に沸いた。

番外・通行止め『シャットダウン』

突然だが。

2メートル級の、所謂某機動戦士のビー〇ライフルのような大砲を撃たれても工〇シャダイばりに「大丈夫だ、問題無い。」なんて言える建物はあの『窓の無いビル』くらいなのであって、もちろんこの闘技場にそんな頑丈さは無いわけで、闘技場の外での轟音や騒音の関係もあり、確実にどつかの誰かがあり得ない位の負担を強いられているわけだ。

それに、無関係の人に入ると確実に騒ぎになってしまったり、アニメとかでよくある『見られてしまったのなら仕方ない。殺るぞ！』みたいな事にもなる。つまり、認識阻害のようなモノが張られているのだ。それを請け負っているのは一人の男。

レベル4の空間操作能力者がそれをしている。能力名は通行止め。名前は西岡。高1だ。

もちろん『裏』に関わっている。そして『魔術』を知り体得、会得している。理由は後に。

それ以外にも多彩な才能を発揮している。

交渉術、話術はあの最大主教アーヴィッシュと腹の探り合いをして、自分の要求を通し、尚且つ最大主教かのじよが出した、自身に不都合な要求の大半を退けた強者だ。

単純な頭脳戦、演算処理の勝負なら、一方通行アクセラレータと同等かそれ以上。持つている知識量も豊富で、イケメン。10人中8人は振り返るだらうつて感じの。

身体能力は平均より少し上。長身で適度に筋肉がついた身体。メガネあり

お気づきの方も居るだろうが、そう、中々のチートなのだ。
そんな彼は闘技場の入り口で壁にもたれていた。

「つたく、能力の持続はめちゃくちゃ体力食うんだけどなあ」

なんてぼやいていて緊張感の欠片も無い。それもそうだろう。

11個の同時並列思考が可能で一方通行アカセラレータと同等の演算処理能力を持つ彼にとっては、連続の能力使用など苦にならない。

今も能力を使用しながらP○PでF○F式をやっている。

「やつと2章か…」

そう呟いた時に闘技場全体が揺れた。麦野がビーム〇イフルを撃つたのだ。

だが、西岡が揺れを感じた瞬間に揺れば収まった。西岡が能力を使っていた。

「全く、威力を考えて撃ってくれよ。頼むから」

彼の能力は『遮断』。今のは揺れを建物から『遮断』しただけ。闘技場が見えないのは、闘技場の外に『闘技場が見える風景』を『遮断』しただけ。

音が外に漏れないのは音を『遮断』しているから。

超能力者なのに魔術が使えるのは『副作用』を『遮断』しているから。

次元干涉にも『遮断』は適応される。ちなみに6次元まで。衝撃エクシューに対しては特に強く、完璧に『遮断』できるのは『天地乖離す開闢の星』まで。

そんな彼に一人の男が現れる。白い髪、赤い目、病的なまでに白い肌。

もちろんアクセラレータだ。

「久しぶりだな西岡」

「そうだな、アクセラレータ」

彼らは友達だ。どちらかというと腐れ縁だが。なにせ幼いころのアクセラレータの唯一の友達だ。

「一回戦はどうだった?」

「勝ったに決まってるだろオガ。つーか、なンでオマエは出てねえんだよ」

「公式じゃあレベル4だからな」

「実際はオレより強エンだけどな」

「お前がナンバー1だ…つ…！」

「ドコの野菜人だよオマエは」

「王子です」

「違エよ」

なんて事をしていた時。不意に西岡の意識が遠のいた。視界に入ったのはとある場所。

「（天界か。まあどうせ雑務だけだし後で行くか。でもラフアエルの説教はきついなあ。）」

「どーしたンだ？」

「いや、なんでも無い」

少し誤魔化す。そして、西岡は本題へ入る。

「そーいえば、『レベル6シフト計画』はどうしたんだ？」

ビクリ、と目に見えてアクセラレータの肩が震える。

「オ、オレのレベルが人形を虐殺するだけで上がるンだ。喜ンでやらせてもらつてるぜ」

「本当か？」

「つたりめエだ！レベル6になれるンな『嘘だな』つ！！」

「お前は喜んで殺してるわけじゃねえだろ。事故つて相手の車大破させた時、ありつたけの金払つて向こうが困るくらいまで謝り倒したのはどこのどいつだよ」

アクセラレータは必死になつて言つ。

「あの頃とは違エンだよ！」

「そうかもな。でも、根は一緒だ。それにお前は『殺した』じゃなく『虐殺』つて言った。それは出来るだけ惨い殺し方をして、2度と自分に立ち向かわないように、もうこんな実験やめたいって思わせるためにそうしたんだろ」

「…オマエに隠し事は出来ねエか そうだ。その通りだ。…無敵になれば、立ち向かう氣すら起きない程に強くなれば、もう諦めてくれるだろうつて思ったンだ」

アクセラレータの頬に雲が伝づ。

「でも、違つた。アイツらは自分のことを『作り物の体に、借り物の心。単価にして一八万円の実験動物』って言った。オレじゃなんも出来なかつた。助けて^エけど、オレじゃあ助けらんね^エ」「助けられるぜ。俺とお前ともう一人の俺の友達で救える」西岡はアクセラレータから田を逸らさずに言った。

「本、当か?」

アクセラレータは信じられな^{ハシナ}いに^{ハシナ}づく。

「つたりめえだ。だから」

はつきりと、聞こえるよ^{ヒテ}いに^{ヒテ}田を逸ら^{ハシナ}す。

「信じる」

アクセラレータはふつと笑つた。

「ああ」

「ニシオカはまだなのですか?」

そう言つたのは背中に純白の羽を付けた。翠髪の女性。(美女)

「オレは知らねえよ^クん」

そう言ったのは背中に純白の羽を付けた。短髪赤髪の男。（イケメン）

「僕も知りませんよ」

そう言ったのは背中に純白の羽を付けた。長髪をボーボーでまとめた銀髪の男。（イケメン）

「私も知らないです」

そう言ったのは背中に純（る）y ピンクのツインテールの幼女。（美少女）

紹介すると上から順番にラファエル、ウリエル、ミカエル、ガブリエルである。

この4人は名前で分かる通り、天使だ。まあ特筆することもないの

でこれで本文終了である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3958w/>

とある魔術と科学の交差

2011年11月20日11時30分発行